

表敬忌避行動, 贈与交換とオレアイ環礁の父子

柄木田 康 之

エピソード

私が最初にオレアイ環礁を調査で訪れた時のエピソードを紹介したい。当時私はフララップ島の北側のイファン村に住んでいた。各村には村の集会所となるカヌー庫があって、男たちの溜まり場にもなっていた。私はイファン村のカヌー庫に陸側にある、本来は男子家屋だったという、台風シェルターに間借りしていた。隣に住む首長が、私のホスト・ファーザーになってくれていて、私はその首長の屋敷地の人々と食事をともにしていた。私の日常は、調査に出る以外は、イファン村のカヌー庫の男たちと時を過ごすものだった。夕方、男たちはヤシ酒の一升瓶をさげてカヌー庫に集まってくる。そこで毎晩男たちはヤシ酒を酌み交わし、漁やさまざまな話題に花を咲かせる。

そんな集まりのメンバーの息子に悪ガキがいた。彼はしばしば小学校をサボり、大人のヤシ酒、タバコを盗み飲み、インスタント・ラーメンなどの店の商品をくすねるのが常だったという。私の住んでいたコンクリート打ちっばなしの建物には、もともと鍵などはかからなかったが、ホスト・ファーザーが南京錠をつけてくれていた。しかし、ある日、私はインタビュー録音のために持ち込んでいたテープ・レコーダーを盗まれてしまった。私は盗難にあうという不注意さをこっぴどく叱られた。

犯人はすぐわかった。そもそも島にテープ・レコーダーは数えるほどしかなかったし、カヌー庫のメンバーの息子が、木に登ってテープ・レコーダーを使っているのを、見た人がいたのだ。そして首長が、子供の屋敷地の人に話して、テープ・レコーダーを取り戻してくれることになった。しかし、返しにきてくれたのは、顔見知りの父親ではなかった。そうではなく、子供の母の兄弟にあたるオジだった。

オレアイの男たちは子育てにたいへん熱心だ。男たちが小さな子供を抱きかかえ、あやしているのを見るのは珍しくはない。抱きかかえた子供がそのままオシッコをもらしてしまっても、嫌な顔一つ見せることもない。中学校の先生をしていたホスト・ファミリーの若い父親は、夕刻には、子供たちのために熱心に漁にでていた。子供が成長していくと、今度は養子を取る。子供が身の回りにいるのが当たり前なのだ。

ところが、このように子育てに熱心な父親でも、子供が反社会的な行為を犯してしまった時に、子供のために謝罪できない。謝罪することが許されているのは、母の兄弟なのだ。オレアイ環礁では、子供を慈しみ養育するという親の側面と、子供に代わって社会に相対する親の側面が、父と母の兄弟によって分かち持たれているという、強い印象をもった。

近代人類学の基礎となっている参与観察にもとづくフィールド・ワークという方法を確立したマリノウスキーは、オレアイ環礁と同じく母系出自をたどる、トロブリアンド諸島での、男性のエディプス・コンプレックスの存在を否定している。母系出自とは、女性を通した祖先との関係という、親族集団の形成原理の一つで、母系出自にもとづく人々の集団を母系出自集団という。母系制社会では、父と子は別の出自集団に属し、父の子供に対する権威は限られる。トロブリアンド諸島にエディプス・コンプレックスが存在しないとされるのは、トロブリアンド諸島の家族の構造が、西欧社会の強い家父長権をとまなう父系家族とは、大きく異なっているからだ。トロブリアンド諸島の父は一様に愛情深く、子供を守り、子供と遊び、助け、養育する。しかし父は子供を罰したり、権威を振るったりしない。子供に対して権威をもっているのは、オレアイ環礁と同じく、母の兄弟な

のだ。したがって、トロブリアンド社会では、父と息子の間には敵意の要素は存在せず、エディプス・コンプレックスの存在も否定されるのだ。マリノウスキーの報告は、エディプス・コンプレックスの普遍性への反証として、人類学の教科書でも広く紹介されている。他方、トロブリアンド諸島にもエディプス・コンプレックスが存在するとする、精緻な反論も存在する。いずれにしても、マリノウスキーの報告は、葛藤、情欲、愛着など、我々が当たり前だと思っている、家族内の人間関係の情緒的側面が、文化によって大きく異なっていることを教えてくれる。

オレアイ環礁の父と子の関係は親密なものだ。しかし子供に対し権威をもち、社会に対し子供を最終的に代弁するのは母の兄弟なのだ。では、父とはオレアイ環礁の子供にとってどのような存在なのだろう。くだんの問題児について、父親が盗んだ食べ物を与えて育てたから、小さな盗みを繰り返す、と指摘する人もいた。父が与えた食物が子供の人格を形成したと見なされているのだ。オレアイ環礁の父子関係は、一言でいえば、結婚からはじまり、第一子の出生、女子の初潮、父から子への土地の贈与、葬儀を始めとする父方親族への貢献と、一連の贈与交換関係の節目として、特徴づけられよう。この関係は、父の死後も、父方親族と継続される。他方、母の兄弟との関係は、敬語の使用や日常生活のタブーなど一連の表敬忌避行動によって特徴づけることができる。敬語の使用や日常生活のタブーは、母の兄弟ばかりでなく、広い範囲の親族に対し適用される義務なのだ。このようななかで、敬語の使用やタブーの尊守が課されない、数少ない関係が、父のカテゴリーなのだ。

1 オレアイ環礁

オレアイ環礁はグァム島の南、北緯7度21分、東経143度53分、カロリン群島のほぼ中央に位置するサンゴ環礁で、約20程の島々からなり、そのうち、五つの島に人が居住している。行政的にはオレアイ環礁はミクロネシア連邦ヤップ州の離島の一つとなる。ヤップ本島と離島では固有の言語が異なっており、現地語ではヤップ本島の人と離島の間には会話を交わせない。ヤップ本島とこ

れらの離島の間には、本島の特定の村を頂点とする伝統的な島嶼間の序列がある。ヤップ本島自体が階層化された社会であり、離島はその階層のなかで低く見られている。第二次世界大戦以前に、日本の植民地政府によって伝統的航海術が抑制されるまで、離島はヤップ本島の特定の地区に対して朝貢交易を続けていた。このような序列は、さまざまな形で再生産され、今日でも生きつづけている。

1987年のオレアイ環礁の全人口は794人、調査の中心となったフララップ島の人口は397だった。環礁外に住んでいるオレアイ出身者も多いが、外に住んでいても、オレアイ環礁と密接な関係を保っている。州都のあるヤップ島からオレアイ環礁には、ときたまビーチ・クラフト機が飛ぶこともある。しかし、一月半に一度程の割合で、離島とヤップ島を巡回する連絡船が、交通流通の生命線だ。船はさまざまな人間と物資を運んでくる。島の人々の主食はタロイモとパンノキの実、副食の中心は魚だ。ブタ、ニワトリ、イヌも食用に飼われている。そして、ココヤシが食用、飲用にとどまらず、建築材など生活全般に利用される。しかし今では、これらの地元産品に加え、米、小麦粉、砂糖、インスタント・ラーメン、インスタント・コーヒー、缶詰類が日常の食品として欠かせない。タバコ、アルコール飲料も持ち込まれる。また、モータ・ボートを利用する現在の漁労では、ガソリンやオイルは不可欠のものだ。これら商品を手に入れるには、小中学校の教員、保健夫など、限られた公務員の現金収入や、町に住む親族からの現物の仕送りが必要だ。しかし、どちらも非常に限られている。



図1 カヌー庫

オレアイ環礁の生活空間は性差によって象徴的に二分されている。女性は土地、農耕、内と結びつき、漁師である男は海、漁労、外に結びつく。オレアイ環礁のどの島であっても、モータ・ボートで村の海岸に近づいていくと、ココヤシの木の間に、巨大なココヤシ葺きのカヌー庫を、最初に目にする。外来者はまずカヌー庫に迎え入れられ、「カヌーの言葉（カパタルワー・kapetaliwa）」と呼ばれる首長への挨拶と贈与が求められる。このカパタルワーによって島での外来者にたいする首長の保護が約束されるのである。

カヌー庫には、文字どおり伝統的カヌー、モータ・ボート、漁具等が保管されるが、それ以上にカヌー庫は男の溜まり場である。家屋より大きく、壁がなく、海岸部に建っていることを除けば、カヌー庫の基本的構造は家屋と違いはない。家屋とカヌー庫の違いは建物の機能や性差に関係している。男の日常は、漁や、カヌー庫の周辺で費やされる。海は男の領域であり、海にいないときも、男はカヌー庫の周りで時を過ごす。カヌー庫自体も海岸線に平行に走る島の中心の路の海側に建っている。

思春期の姉妹がいる若者は、兄弟姉妹の間にあるタブーのために、カヌー庫で寝泊まりする。しかし既婚であろうと未婚であろうと、男たちは日中多くの時間を屋敷地で過ごそうとはしない。男たちは目覚めるとすぐに、彼らがいつも世話をしている、ココヤシの手入れに出かける。その後、集めた樹液を屋敷地に持ち帰り、インスタント・コーヒーや前夜の残り物などの簡単な食事をすませる。そしてカヌー庫前の海で水浴びをし、カヌー庫で乾いた禪に着替える。そのまま濡れた禪をカヌー庫に乾すこともめずらしくはない。そしてその日の仕事の計画がカヌー庫で確認される。

日中男たちは昼寝をしたり、談笑したりして、カヌー庫で多くの時間を費やす。夕方のココヤシの手入れと水浴の後、男たちは三々五々ヤシ酒の一升瓶を掲げてカヌー庫に集まり、各自の持ちよったヤシ酒がなくなるまで酒盛りをする。ビールやウオッカなど輸入酒によるトラブルはしばしば問題視されるが、カヌー庫の前のヤシ酒の酒盛りは、そのカヌー庫に集う男たちの活力を表す重要な男の活動なのだ。

カヌー庫では島のさまざまな事柄を決定する会議が催される。島の会議は、首長たちの指導のもと、マール (mwal・男性) と呼ばれる年長の男性によって構成される。しかし女性に関する話題が話し合われる時には、女性たちもカヌー庫にやってくる。このような時に女性はカヌー庫の陸側に、男は海側に座らなければならない。カヌー庫は漁労と関連した男の活動の中心であると同時に、島の政治の中心であり、外界との接点なのだ。

男たちが共同で漁にでる時は、セパル (sepal) と呼ばれる個人所有のカヌー小屋から、ボートや手漕ぎカヌーを出すことはあっても、釣果はカヌー庫の前に一旦集められる。そして魚はカヌー庫から、女性の領域である、屋敷地に分配される。魚の一部は男の食物としてカヌー庫の前の浜辺で男によって調理される。調理が終わるころ、子供たちが、それぞれの屋敷地から、漁に参加した男のための食物を運んでくる。それはタロイモ、パンノキの実、バナナ、サツマイモ、米であったりするが、女性に関する植物性の食物である。つまり生産活動は、男女間の交換として生きられている。カヌー庫はこの男性側を象徴するものである。

これに対し、土地と家屋は女性の領域である。女性の活動の中心は、島の中央にあり、女性によって耕作される、タロイモ田だ。古くからの屋敷地には、人々が移住してきた時期にまで遡るというタロイモ田がある。原則として、家屋は島の中心の路の内陸側に建っている。これは海側に建つカヌー庫とは対称的なのだ。

屋敷地の中心は女性である。オレアイ社会の基本単位は、現地語でボゴト (bugot) と呼ばれる屋敷地だ。ボゴトは屋敷地であると同時に家族と不可分に結びついていて、母系出自を理念とする、ハイラン (gailang) と呼ばれる出自集団に属すと見なされている。ここではハイランをクランと呼んでおこう。オレアイ環礁の土地は非常に細かく分けられていて、一筆一筆ごとに個別の名前がある。このような土地には屋敷地、ココヤシ林、タロイモ田の区別がある。オレアイ社会には、家族に共通した、家族を他の家族と区別する、姓にあたるものは存在しない。ファースト・ネームはカトリックの洗礼名、ラスト・ネームは伝統的な名前、どちらも個々につけられる。村の中で、家

族はその家族が居住する屋敷地名で区別されている。そして屋敷地には、ココヤシ林、タロイモ田が、一連の土地として付属しており、これらの土地も、家族が住んでいる屋敷地の土地と見なされる。

屋敷地には、マルーム (mwalumw) と呼ばれる炊事小屋が通常一つと、イム (imw) と呼ばれる家屋が、一つないし複数、建っている。家屋はその使用目的に応じて別棟になり、分棟形式を取る。一つの屋敷地に複数の家屋があることはめずらしくないが、炊事小屋は一つとされる。世帯が大きいため一つ以上の炊事小屋がある場合でも、一つの屋敷地に住む人々は、炊事小屋をともにすると主張する。炊事小屋が一緒であることが世帯のまとまりを表すからだ。実際、行事などのためにご馳走を準備するときには、屋敷地の女性たちは、年長の女性の指揮で料理を共にする。

一つの屋敷地には、母系出自を共通とする複数の女性と、その婿入りした夫たち、これら夫婦の子供たちが暮らしている。文化人類学では、結婚後夫が妻の家族に婿入りする結婚の形態を妻方居住婚、親族関係にある複数の家族が同居する家族を、拡大家族と呼んでいる。オレアイ環礁の屋敷地は、基本的には妻方居住婚にもとづく拡大家族によって占められる。しかし、夫婦とその子供が夫方の屋敷地に住む例や、妻ないし夫の養父母の屋敷地に住むことも珍しいことではない。また必要に応じて、夫婦は妻方、夫方、養親の屋敷地を棲み分けている。屋敷地で権威をもつのは、父(テマル・temal)ではなく、別の屋敷地に住む、母の兄弟、(マール・ナップ・mwalelap)だ。女性の長は、年長の女性であり、ショーブト・トゥグファイ(年長の女性・shoabutugufaiy)と呼ばれる。



図2 妻方居住婚家族

個々の夫婦は個別に屋敷地内の別棟に暮らすことが多く、結果として一つの家屋を夫婦とその子供が占めることが多い。しかし、核家族が一つの家屋に暮らすということが、家族の規則ではない。先に述べたように、思春期の姉妹がいる若者は、姉妹と同じ建物で寝起きしえず、しばしばカーヌー庫などの男子家屋に寝起きする。またオレアイ社会では、養子制度が非常に発達していて、大部分の子供は、実親と養親の二組の親をもっている。

この養子制度は、日本の養子制度のように、養親が実親に取って代わるというものではない。むしろ養子は、実親に加えて、新しい養親をも獲得するというのがぴったりする。子供は実親と養親の二組の親に育てられ、特に、年少の子供は実親と養親の元を行き来して育てられている。私のホスト・ファミリーの小学校に入ったばかりの娘は、島の南側の村にある、母の父の姉妹の屋敷地に養取されていて、しばらく姿が見えないと、その屋敷地に行っていると説明を受けた。その妹は、父の生家にあたるの隣島の屋敷地に養取されていた。彼女は、両親から離れるのをいやがり、何度か泣く姿をみせた。我々の社会のように、一つの境界の明瞭な家族が一つの家屋に住んでいると考えるのは、オレアイ社会では的外れなのだ。子供は、関係のある家屋、屋敷地の間を、行き来しているのだ。

II 母の兄弟と表敬忌避行動

村の中を歩いていると、屋敷地から「ブトグ・モゴ (buutog mwongo)」と声が掛かる。こちらに来て食べ物を食べなさいという意味だ。屋敷地でココヤシの果肉を削り、ココナツ・ミルクの準備など、食事の準備をしている女性が、顔見知りの村人に声をかける。オレアイ社会では、食物を分かち合うことは、緊密な社会関係の存在をしめす大切なイデオムだ。

しかし姉妹は兄弟に対して、また年少者は年長者に対して、「ブトグ・モゴ (buutog mwongo)」と言うことは禁じられている。兄弟や年長者にはイレティー (iletiy)、ハッタウル (gettaur) など、特別な敬語を用いなければならない。このような特別な敬語をハッスロウ (gasorou) という。ハッスロウには敬語ばかりでなく、敬意を表す所作、

目上の人間に対するタブーなど、いくつかの行動パターンがある。ここでは目上の人間に対して敬意をあらわす一連の行動とタブーを表敬忌避行動と呼ぶことにする。

表敬忌避行動は、相対年齢にもとづくものと、兄弟姉妹関係にもとづくものに、大きく分けることができる。兄弟姉妹間の表敬忌避行動には、エ・タブ・マガヤン (Ye tab mangayang) という特別な名称があるのに対し、相対年齢にもとづく表敬忌避行動にはハッスロウという一般的名称しか存在しない。相対年齢にもとづく表敬忌避行動は、ホッパロ (goparou)、狭い意味でのハッスロウ、エタブ・ファスタグ・ウォアム (Ye tab fastag woam) の三つに分けられる。

ホッパロは、年長者の前で低い姿勢をとる表敬忌避行動である。カヌー庫に座っていると、女性が腰をまげ、しばしばカヌー庫を避けるように、遠回りに歩いていくことに気が付く。女性が、兄弟あるいは母方のオジが、カヌー庫で座っているのを見つけ、兄弟や母方のオジより、高い姿勢をとったまま通り過ぎるのを避けているのだ。話をしていた男性が突然立ち上がることもある。これはホッパロの姿勢をとっている姉妹や姉妹の娘を見つけ、彼女たちが腰をかがめずにスムーズに歩けるよう、立ち上がるからだ。極端な場合、女性は腰をかがめるだけでなく、膝立ちの姿勢になることもある。ホッパロは女性ばかりでなく、男性もとる姿勢であり、年長のキョウダイ、系譜上の地位が高いキョウダイ、妻のキョウダイに、この姿勢をとる。このような親族関係にある、座った男性のそばを通るとき、腰をかがめ、「ソロウ (sorou・敬意)」と声を掛けて通りすぎるのだ。



図3 表敬忌避行動ハッスロウ

狭い意味でのハッスロウは、ホッパロと同じ範囲の親族関係者に対し、敬語を使用しなければならない義務である。まるで挨拶のように使われている、「こちらに来て食べ物を食べなさい(プトグ・モゴ、buutog mwongo)」という常套句も、「タバコをどうぞ (ホ・ボ・イユル・タマゴ、go be iul tamago)」、「ヤシの実をどうぞ (ホ・ボ・イユル・リュウ、go be iul liu)」という近しい関係に現れる表現も、年長の兄弟や母の兄弟には使えない。「モゴ (食べる)」は食べるの敬語にあたる「ハッタウル (gettaur)」に、「イユル (飲む)」は、もともとは「分配する」を意味する、「イレティー (ileetiy)」という敬語に置き換えなければならない。近年では、敬語を使うのを面倒がる若い女性が、敬語の代わりに英語もつかう。これには「モゴ」の代わりに「パウンド (pound)」、「見る (piipiyy)」の代わりに「チェック (check)」などの例がある。それでも日常語は使えないのだ。

名詞の敬語もある。例えば、年長の兄弟や、母方の兄弟の首から上の部分に言及するには、「シモム (あなたの髪・shimom)」とではなく、「ウォアム (あなたの上の部分・woam)」という特別な敬語を使う。そして、敬語表現で直接言及することが禁じられている、年長の兄弟や母方のオジの顔に触れることが禁止されている。この表敬忌避行動は「エ・タブ・ファスタグ・ウォアム (Ye tab fastag woam)」という。

兄弟姉妹間には、「兄弟姉妹の禁忌 (エタブ・マガヤン、Ye tab mangayang)」とよばれる特別な禁忌が存在する。「兄弟姉妹の禁忌」には食器類共有の禁忌、身の回りのモノをしまうバスケットに手を入れることの禁忌、寝具共有の禁忌、衣類共有の禁忌の四つがあるが、いずれも兄弟姉妹間の親密な関係を禁止している。

ところでオレアイ語で、兄弟や父など、親族関係者を表す言葉が示す親族の範囲は、日本語のものとは全く違っている。親族関係を表す語彙は親族名称と呼ばれる。日本語の親族名称体系はエスキモー型と呼ばれ、直系の親族と傍系の親族を区別する親族名称体系だ。したがってキョウダイはイトコと区別され、オジ、オバはチチ、ハハと区別される。オレアイ語の親族名称体系は、ハワイ型の親族名称が変化したもので、基本的に親族は

性と世代によって分類される。ハワイ型親族名称体系では、直系親族と傍系親族は区別されないで、チチとオジ、ハハとオバ、イトコとキョウダイ、ムスコ・ムスメとオイ・メイの区別は存在しない。一世代上位の男性親族は全てチチ、女性親族はハハと分類され、同世代の親族は、イトコであろうとキョウダイであろうと、キョウダイと分類され、一世代下位の親族は全てコと分類される。

しかしオレアイの親族名称体系では、ハワイ型の親族名称体系の特徴に加え、異性のキョウダイ・シマイ関係が強調される。上位世代ではハハのキョウダイ、つまり母方オジはマール・ナップ (mwalelap・大きな男) と分類され、下位世代のシマイのコはファテユウ (fatiuw・卵) と分類される。同一世代では、同性のキョウダイ同士、シマイ同士がブシ (bisi-) と分類されるのに対し、異性のキョウダイ・シマイはマグヤ (mwangeya-) と分類される。したがって親の世代の親族は、ハハの異性キョウダイである母方オジ (マール・ナップ) を除いて、全てチチ (tema-) かハハ (sila-) と分類される。同世代の親族は同性キョウダイか異性キョウダイであり、下位の世代の親族は男性から見た姉妹の子供、ファテユウをのぞき、全てコ (laiu) として分類される。日本語に比べて、オレアイ語では広範な範囲の親族が、チチ、ハハ、母方のキョウダイ、コ、オイ・メイのカテゴリーに分類されるのである。

これを理解して初めて、表敬忌避行動の社会関係を理解することができる。ここでは話の起点となる個人をエゴと呼ぼう。男性エゴは、母の兄弟、年長の兄弟に対して表敬忌避行動をとる。女性エゴの場合には、兄弟は全員、年長の姉妹が加わり、母の兄弟、兄弟、年長の姉妹に対して表敬忌避行動をとる。兄弟は姉妹に表敬忌避行動をとる必要はない。

傍系の親族の間では、系譜の本末を、考えなくてはならない。自らの母が年少であった場合、エゴは母の姉の子供に表敬忌避行動をとる。同様に、自らの父が年少であった場合、エゴは父の兄の子供に表敬忌避行動をとる。さらに姉妹の子供は兄弟の子供に表敬忌避行動をとらなくてはならない。これは姉妹が兄弟に表敬忌避行動をとることと同じことだ。オレアイ語では姉妹の子孫はラ

イル・ショウプトウ (女性の子供・laiul shoabut) と分類され、兄弟の子孫はライル・マール (男性の子供・laiul mwal) と分類されるが、ライル・ショウプトはライル・マールに表敬忌避行動をとらねばならないのである。

姻族の間では、夫婦の表敬忌避行動は一体と見なされ、夫は妻が、妻は夫が表敬忌避行動をとる人に対し、表敬忌避行動をとらねばならない。

表敬忌避行動の規則には幾つかの例外がある。年少の子供はこのような表敬忌避行動をとる必要がない。そうしなければならないのは、男が男になってから、女は女になってからといわれている。表敬忌避行動がインセスト・タブーに関連することをうかがわせる。また首長の子供は、首長が父であるがゆえに、首長に表敬忌避行動をとる必要はない。しかし、カヌー庫の集会など公の場では、首長である父に表敬忌避行動をとるという。

オレアイ社会では、親族関係者の間で、非常にこまかな表敬忌避行動が定められており、これが及ぶ範囲はきわめて広い範囲にわたる。このような中で、父と子の関係は、母子関係、夫婦関係とともに、表敬忌避行動を免れている。逆に表敬忌避行動が顕著なのは兄弟姉妹関係、年齢差のある同性のキョウダイ関係、母の兄弟と姉妹の子供の関係である。また、表敬忌避行動の中で最も優位にあるのは、母の兄弟、特に族長となるような、系譜的地位が高い母の兄弟である。家父長制的な家族を想定するなら、父と息子間に存在するであろう緊張関係が、オレアイ環礁では、兄弟間、兄弟姉妹間、母方の兄弟と姉妹の息子間に存在するが、父子関係はこのような緊張関係を免れているのである。

III 父子関係と贈与交換

表敬忌避行動を免れることが、オレアイ社会の父子関係の第一の特徴であり、これは父と子の関係を親密なものにしている。さらに父子関係に特徴的なことは通過儀礼における、父の屋敷地と子供の間の特異な関係である。夫婦の結婚を出発点として、第一子の妊娠、出産、養取、女子の初潮、父から子への土地の贈与、葬儀における腰布の貢献と、子供と父方親族集団の間には贈与交換関係が連綿と続くのだ。

日本の血縁関係の認識では、両親との血縁関係が強調されるが、オレアイ社会では父と子の血の繋がりが強調される。子供は父の血を受け継ぎ、その血は生殖における父の精液がもとになっていると見なされている。婚出した兄弟の子供はライル・マール（男性の子供）と呼ばれ、生家の屋敷地では一目置かれる存在だ。ライル・マールが卓越するのは、それが婚出した兄弟、母の兄弟の子供だからだが、人々はそれをライル・マールが父の血を受け継いでいるからだと表現する。通過儀礼のおもなテーマは、子供の父の集団と母の集団からの腰布の贈与や集団間の食物の交換である。キリスト教化の結果、月経・出産をめぐる、さまざまな儀礼は今日では見られない。けれども父方関係の重要性は、土地保有の歴史や、葬儀で遺体の埋葬に用いられる、女性の腰布の集積など、さまざまな場面に見出すことができる。

オレアイ環礁における結婚は、夫が身の回りの物を持って、妻の屋敷地に移り住むだけのもので、儀礼らしい儀礼はない。オレアイ環礁の人々は熱心なカトリック教徒なのだが、子供が何人もできても、結婚を教会に届けないことは稀ではない。結婚して最初の儀礼が行われるのは、妻が第一子を妊娠した時であった。

妻の第一子の妊娠が明らかになるとハテユウテユウ（水浴・gatiuti）とハタブルモゴ（最後の食物・gatabulemwongo）という儀礼が行われた。妻の妊娠が明らかになると夫方の親族がやってきて、妊婦を夫の屋敷地に連れて行く。これは主として夫の姉妹、生まれてくる子供から見ると父の姉妹の役目である。父の姉妹は子供の母を水浴させ、ウコンの粉で飾り、新しい腰布を贈与したという。このよう水浴は子供の出生前に、様々な関係にある親族によって行われたというが、最初に水浴させるのは夫方の親族でなければならなかった。

ハタブルモゴ（最後の食物）は、出産の三月ほど前に行われる儀礼で、妻の屋敷地、妻の父の屋敷地、夫の屋敷地、夫の父の屋敷地の間で行われる食物の交換である。この交換が最後の食物と呼ばれるのは、最初の出産が女性にとって危険なものであり、女性の生死が予想できなかったからだと言われる。妻、妻の父、夫、夫の父の、四つの

屋敷地の人々は儀礼の日、タロイモ田に出かけ、イモを収穫し、調理する。そして妊婦以外の屋敷地の一つが、妊婦を迎えにきて、彼女に一皿のタロイモを与える。妊婦はそのタロイモを自分の屋敷地に持ち帰り、皿を空にし、タロイモでもう一度満たし、食物を返しに行く。妊婦の父、夫、夫の父という、三つの集団と妻の屋敷地との食物のやり取りが終わると、全員が妻の屋敷地に集まり、残りの食物を合わせて分配したという。最後の食物の儀礼では、子供の父の屋敷地が優先権をもつことはないが、集まってくるのは、子供と父方関係で連なる屋敷地なのである。

オレアイ環礁のほとんどの人は、出生と同時に近親者によって養取される。夫婦の第一子の場合、父方の親族が養取するのが規則である。第一子が父方の屋敷地に養取されない場合は、子供が父の屋敷地にとって重要ではないと見なされるという。第二子以降は父方、母方いずれの近親者によっても養取されうる。実際にオレアイ環礁の島の一つ、フララップ島を調べた時には、大部分の人々が父の姉妹夫婦によって養取されていた。これはつまり父の屋敷地に養取されているということである。

第一子が養取されるのは、第一子が年長であることに意味がある。オレアイの男は結婚後、妻の屋敷地に居住するのが規則である。男の屋敷地から見ると、婚出した兄弟はその潜在的母方の兄弟にあたり、屋敷内での地位が高い。この母の兄弟の高い地位を置き換えるために、婚出した男性成員の年長の子供、つまり第一子が養取されるのである。

夫婦の子供の初潮においても、父方親族は重要な役割を果たした。オレアイ環礁がカトリック化される以前には、月経中の女性は四日間隔離されていた。娘が初潮となると、屋敷地の人々は父の屋敷地にそれを知らせ、父の屋敷地の人々は調理されていない食物、ココヤシの実の束を運んできたといわれる。父方親族がやってきたとき、彼らは初潮となった娘を水浴させ、腰布、ベッコウ製のベルト、首飾りを贈り、ウコンの粉で飾ったといわれる。このような贈与は、娘が隔離される四日間に渡って、さまざまな親族から贈られたとされるが、最初に贈るのはやはり父方親族であった

といわれる。

IV 土地の贈与

オレアイ社会の父子関係は、子供と父の屋敷地との間の一連の贈与交換によって築かれるものだ。このなかでも重要なものは父から子に贈られる土地である。オレアイ社会では、個人は父の屋敷地の土地を使用し、その土地から食物を得ることができる。しかし父親は子供が成長し、結婚生活が進展していくと、子供に自らの屋敷地の土地を使用させるだけではなく、最終的にその土地を贈ろうとする。

オレアイ社会の屋敷地には、細かく区分された屋敷地・ココナツ林・タロイモ田が属している。これらの土地のひとつひとつは、土地の起源にもとづき、二つのカテゴリーに分類されている。第一の土地のカテゴリーはシャピル・ボゴト (shapil bugot・根幹の土地)、ファッシュル・ボゴト (faashul bugot・真の土地)、イラーリファト (元来の屋敷地・ilaalifat) などと呼ばれ、屋敷地に古くから伝わる、完全な保有地である。第二はボゴト・ファゲトホ (bugot faangetogo・こちらに贈られた土地)、ボゴト・ファン (bugot faang・贈与の土地) あるいはホンニワ (gonniwa・カヌーの獲物) と呼ばれる屋敷地に贈与された土地である。

このような贈与される土地は、基本的には父によって与えられ、屋敷地の本来の土地とは区別される。本来の土地は母系出自を共通にする屋敷地の成員全員のものだと見なされている。ところが父から贈与を受けた土地は、贈与を受けたその兄弟姉妹だけのものとされ、他の屋敷地の成員と共有される土地とは一緒にはならない。このため、父から贈られた土地は、母系に連なる屋敷地の成員のなかに、新しい区分を生み出すことになる。屋敷地の成員の一部となる兄弟姉妹が、父方の屋敷地の土地を獲得した時、屋敷地内に新しい屋敷地への萌芽がはじまるのだ。

オレアイ環礁には、1909年にドイツの民族学者クレイマー (Krämer) の調査隊が入り、クレイマーは当時のフララップ島の屋敷地と住民のリストを残している。私は1988年、最初に調査に入った時、自分の調査の屋敷地と住民のリストをクレイマーのリストを結びつけるため、古老にインタ

ビューし、屋敷地の祖先の名前や系図の収集につとめた。私はかろうじて、クレイマーの報告する屋敷地と、現在の屋敷地の系譜関係を辿ることができた。調査の結果はとても興味深いものだった。クレイマーは22の屋敷地を報告しており、私の調査では34屋敷地があった。12の屋敷地がクレイマーの時代以降、新たに生じたことがわかるが、この新たに生じた屋敷地のうち、8例が父の屋敷地から土地の贈与を受けて、新たな屋敷地として独立した例だった。その他には、当時利用されていなかった本来の土地が再び利用されるようになった例や、ドイツ・日本統治時代の植民地開発で、コブラ生産に土地を奪われた人々に、フララップ島の人々が土地を与えた例があった。このように系譜を調べていくと、オレアイ環礁で、新たな屋敷地が母系クラン内に行けるのは、女性、あるいはその女性を母とする兄弟姉妹が、父方関係や養取関係にある他の屋敷地から、土地を得て屋敷地を創始した時であることが見えてきた。反対に兄弟姉妹が、新たな土地を父から獲得できない場合は、人々は一時的に違った屋敷地に別々にすむことはあっても、世代を越えて存続する新しい屋敷地を創り出すことはない。屋敷地が生まれるには、父の屋敷地の土地を獲得することが必須なのである。

このような慣行は土地と母系クランの関係をとても複雑なものにする。父が土地を子に贈ることで、土地が母系クランの間を循環することになるからだ。屋敷地がどの母系クランに属しているかを尋ねていて、インタビューがうまく進まないことがあった。例えば、「何々屋敷地は住んでいる人はAクランだが、土地はBクランだ」などの答えが、また「自分らは他人の土地に住み、他人が自分らの土地に住んでいる」などの答えが返ってくるからだ。さらに、人々はオレアイ環礁の屋敷地や土地保有についての、個別的な事例の知識はもっていても、鳥瞰図的な全体像は持ち合わせていないように思えた。系譜や土地保有の歴史は限られた親族の間で保持される秘密事項であり、他人に話すようなことではないという。反対に、他者の系譜や土地について語ることは、その人の権威に対する挑戦となる。このような系譜や土地の歴史が語られるのは、土地争いが起こり、争い

の当事者が、土地保有権の正当性を証明する時だと言われている。

面白いのは、オレアイ環礁で実施した調査項目の中で、人々が一番興味を示したのが、系譜と土地保有に関する質問だった。人々から屋敷地の土地と系譜についての資料をせがまれ、はたしてこの人に教えていいものか、頭を抱え込んだのは一度だけではない。しかし、土地争いが表面化することはまずない。土地についての主張に違いがある時、対立する村人は、お互いに相手を避けてしまっていて、相対峙しないからだ。

V 葬儀における腰布の貢献

父の屋敷地から土地を得た屋敷地は、土地を贈ってくれた屋敷地のカヌー庫の建設、共同漁労、葬儀の機会に、食物、ヤシ縄、腰布で返礼しなくてはならなかった。このような機会に、贈物を返さない、土地の与え手は問題の土地を没収することができたという。しかし土地を没収するという行為は、対立をさけるというオレアイ社会のエトスに反しているからか、現実に土地が没収されたという事例を手にすることはなかった。また私が参加したカヌー庫の修復や葺き替えでは、村と村の間の協力と返礼が重要で、父から土地を贈られた屋敷地が、特に際立った贈物をするともなかった。



図4 腰布織り

しかし、葬儀の腰布の貢献においては、父子の関係は現在でも際立っている。オレアイ環礁では、男性の禪、女性の腰布が伝統衣装である。男性の禪は今では輸入布が利用されるが、女性は、時間が許せば、せっせと織物に励んでいる。これは腰布が衣類として利用されるだけでなく、さまざま

な伝統的知識に対するお礼、離島を支配するヤップ本島の首長に対する貢物など、貴重品としても用いられるからだ。貴重品としての用途の中でも際だっているのは、葬儀の際に贈与として用いられる時だ。

オレアイ環礁の人々は亡くなる時、何日にもおよぶ手厚い看護と見舞いを受け、近親者に見守られながら息をひきとる。すると、付き添っていた近親の女性の号泣がはじまり、やがてそれは葬歌と変わっていく。一晩中、女性の葬歌と号泣の繰り返しが、延々と続くのだ。死のニュースは広がり、村の屋敷地から腰布を手にした女性が弔いに訪れる。腰布は村の各屋敷地から贈られるだけではない。無線で死のニュースを知った他の島からも、翌朝にはモータ・ボートに乗った弔問客が、腰布を携えやってくる。腰布の数は百をゆうに越えるだろう。死者はきれいに拭かれ、ウコン粉で飾られ、大量の腰布にくるまれ、木製の棺に納められて、埋葬される。

このような葬儀の腰布の貢献において、父子関係は際だっている。葬儀では島中の屋敷地の人々が腰布をもってくるし、他の島からの弔問客も腰布を持参する。つまり、ありとあらゆるところから腰布が集められるのだが、死者との社会関係によって腰布の貢献の仕方は違ってくる。死者と親族関係がない場合、人々は直接死者の屋敷地に届けるのではなく、自分が属する母系出自集団の年長の女性の屋敷地に、腰布を持参する。集められた腰布は、母系出自集団の貢献として、死者の屋敷地に届けられる。

死者の親族はイラーリファト (ilaalifat)、タム (tam)、ラーイユ (laiu) という三つのカテゴリーに分類される。ここでは、イラーリファトとは死者の生まれた屋敷地をさす。つまり死者の本来の母系出自集団の屋敷地をさす。タムはもともと父を表す言葉から派生しているが、ここでは父の屋敷地をさす。つまり死者の屋敷地に婚入してきた男性の生家にあたる屋敷地である。ラーイユはもともと子という意味だが、ここでは死者の屋敷地の男性成員の子供の屋敷地をさす。つまりイラーリファト出身の男性の婚出した先の屋敷地である。言い換えると、タムとイラーリファトとラーイユは、男性の婚出によって結びつけられた三つの母

系集団の屋敷地である。この間の関係をオレアイの人々は父と子の関係として認識しているのである。

イラーリファト、タム、ラーイユの屋敷地に腰布を持参するのはそれぞれの屋敷地のライル・マール（男性成員の子供）である。つまり死者の近親者は、自分がイラーリファトのライル・マールだと思えば、イラーリファトの屋敷地に腰布を持参し、イラーリファトの腰布の集積に貢献する。一方、タムとラーイユの屋敷地のライル・マールは、タムおよびラーイユの屋敷地に腰布を集積し、そこからイラーリファトに腰布を贈るといふ。つまり近親者は、死者との関係を父と子の関係にそってたどり、腰布を貢献する。そしてこの関係は世代を越えて記憶されていくのである。



図5 葬儀における腰布の贈与

結び - 兄弟の子供と姉妹の子供の相互補完的優越性

オレアイ環礁の子供にとって、二人の男性が、我々にとっての男親の役割を果たしているように思われる。母の兄弟と父である。母の兄弟は日常生活において厳格に規定されている表敬忌避行動の側面を代表し、父は子の屋敷地と父の屋敷地の間に連綿と継続される贈与交換関係の起点となる。文化人類学の理論では、このように子供に対して関心をもつ二人の男性の存在は、母系社会に固有な特徴であるとみなされてきた。母系社会では父は子供を慈しんでも、子供に地位や財産を相続譲りえないと見なされるからだ。そうしうるのは母の兄弟なのだ。この二人の利害の調整は、母系社会の解決しがたい構造的問題と見なされ、「母系パズル」と呼ばれた。とりわけ近代化、グローバル化に向かう社会変化においては、「母系パズ

ル」を抱える母系社会は不安定で、崩壊しやすいと見なされた。しかし父と母の兄弟は子供をめぐって対立するしかないのだろうか。オレアイ社会は異なる解答を用意している。

オレアイ環礁の父と母の兄弟の問題は、ライル・マール（男性・兄弟の子供）とライル・ショーブト（女性・姉妹の子供）という二つのカテゴリーの関係として表れる。一組の兄弟の子供と姉妹の子供は、一人の男性を、父、ないし母の兄弟と見る。このライル・マールとライル・ショーブトの関係は、場面に応じてどちらか一方が優位となる、「相互補完的優越性」と呼ぶうる関係にあり、単純な対立関係にあるのではない。

表敬忌避行動の脈絡では兄弟の子供は姉妹の子供に優越するので、姉妹の子供は兄弟の子供に対して表敬忌避行動をとり敬意を示さなくてはならない。しかし、土地保有集団としての屋敷地に関する時は、姉妹の子供は兄弟の子供に優越する。

オレアイ環礁の屋敷地は母系出自を共にする人々によって主として構成される。しかし新たな屋敷地の形成には、父子の関係を欠くことはできない。父は自らの屋敷地の土地を妻・子の屋敷地に贈与する。これは父の屋敷地と子の屋敷地間の連綿とした贈与交換関係の一環である。しかし、土地の受け手、兄弟の子供は、贈与された土地のゆえに、父の屋敷地に義務を負い、これを怠った場合、姉妹の子供は兄弟の子供をその土地から放逐しえた。この優越は、表敬忌避行動の脈絡での兄弟の子供の優越とは対照をなしている。

兄弟の子供と姉妹の子供の関係は、「母系パズル」論が指摘する矛盾ではなく、場面に応じて相互補完的な優越性を表しているのだ。

参考文献

- 牛島巖 (1987)『ヤップ島の社会と交換』1-31 弘文堂。
 須藤健一 1989『母系社会の構造－サンゴ礁の島々の民族誌』紀伊國屋書店。
 スパイロ、メルフォード・E (井上兼行訳) (1990)『母系社会のエディプス－フロイト理論は普遍的か』 紀伊國屋書店。

Fathers and Children in Respect-Avoidance Behavior and Gift Exchanges on Woleai Atoll

KARAKITA Yasuyuki

Abstract

This paper has focused on complimentary superiority in cross-sibling relation as a binding force between land-holding groups in Woleai. Woleaian society might be characterized by matrilineal descent groups and uxori-local residence in an ideological sense. However, at the center of its structuring principles is cross-sibling relationship. Two categories are recognized among the members of a matrilineal clan, i.e. *laiul mwal* (children of men) and *laiul shoabut* (children of women). These two categories show a complementary superiority in the contexts of respect-avoidance behaviors and the formation of land-holding groups. While respect-avoidance behavior between parallel-siblings depends on relative age and genealogical seniority, in relationships involving cross-siblings, the direction of respect-avoidance behaviors is always from sister's side to brother's side. Thus, children of men are superior to children of women. The superiority of children of men is explained by the reasoning that the children of men extend the senior status of brother and mother's brother, who marry out from the homestead of the children of women.

On the other hand, the children of women are superior to the children of men in the formation of land-holding groups. Matrilineal descent is the rule for primary group membership. However, a segment within a lineage is formed only when children of men receive land from their father's group, and they have certain obligations towards their father's group. If the children of men could not meet these obligations, the children of women could confiscate the land concerned from the children of men. Thus, through the patrilateral gifts of land, children of women are superior to children of men. This complimentary superiority of the children of men and the children of women underlies inter-group alliance.

(2013年5月31日受理)